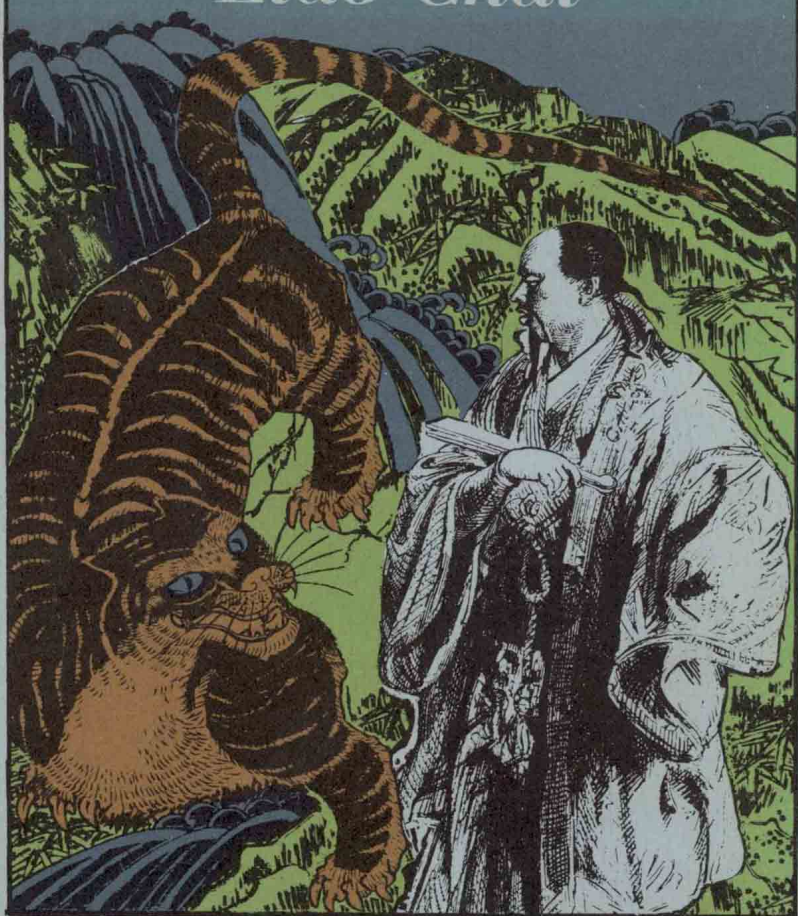


P'U SUNG-LING

Liao-Chai



La Biblioteca di Babele
collana di letture fantastiche
diretta da Jorge Luis Borges

Kokusho Kankokai editore

蒲松齡 聊齋志異 中野美代子訳 刊行
者佐藤今朝夫 組版大日本印刷 印刷セ
イユウ写真印刷 製本大口製本 昭和六
十三年十二月二十一日発行 東京都豊島
区巢鴨三―五―一八 電話東京九一七一
八二八七 国書刊行会 定価一八〇〇円

目 次

序 文 J・L・ボルヘス	9
聊齋志異 (蒲松齡)	
氏神試験	13
老僧再生	19
孝子入冥	25
幻術道士	41
魔術街道	47
暗黒地獄	53
金貨迅流	65
狐仙女房	69
虎妖宴遊	77
猛虎贖罪	87
狼虎夢占	93
人虎報仇	103
人皮女装	109
生首交換	121
紅樓夢 (曹雪芹)	
夢のなかのドッペルゲンゲル	141
鏡のなかの雲雨	149

聊齋志異

中野美代子 訳

編纂/序文

J・L・ボルヘス

編集協力 マリア・エステル・バスケス
装丁装画 フランコ・マリーア・リッチ
マルチェッラ・ボネスチ
序文翻訳 土岐恒二

原 題(カッコ内は訳題)

考城隍(氏神試験)

長清僧(老僧再生)

席方平(孝子入冥)

单道士(幻術道士)

郭秀才(魔術街道)

龍飛相公(暗黒地獄)

錢 流(金貨迅流)

褚遂良(狐仙女房)

苗 生(虎妖宴遊)

趙城虎(猛虎贖罪)

夢 狼(狼虎夢占)

向 泉(人虎報仇)

画 皮(人皮女装)

陸 判(生首交換)

以上「聊齋志異」より

『紅樓夢』第56回より

(夢のなかのドッベルゲンゲル)

『紅樓夢』第12回より

(鏡のなかの雲雨)

Copyright © 1979 Franco Maria Ricci editore, Parma, Milano
Japanese translation right arranged with Franco Maria Ricci editore
through Motovun Co. Ltd, Tokyo.

国書刊行会

序文

たいそう合理的な孔子は『論語』のなかで靈的存在（鬼神）を敬すべきことを勧めているが、すぐに続けて、距離を置いたほうがいい（而遠之）と付け加えている。道教や仏教の説話はこの千古の金言を敷衍したものである。中国ほど迷信深い国もないだろう。この国が生んだ浩瀚な写実小説——のちほど触れることになる『紅樓夢』——は驚異にみちみちているが、その理由はまさにそれが写実的だからであり、いかに驚異的なことがらもあり得べからざることとは考えられず、眉唾ものとさえ判断されることはないのである。

本巻に選んだ物語の大部分は、字を留仙、号を柳泉という蒲松齡の『聊齋志異』に収められているもので、十七世紀の作品である。私は一八八〇年に出版されたハーバート・アレン・ジャイルズの英訳をもとにした。蒲松齡については、彼が進士の試験に一七一一年まで及第できなかったということ以外、あまりわかっていない。彼が文学の創作に全力を傾注し、その結果、彼の名

を高からしめることになる書物を編んだことは、この不運な挫折に起因するといわなければならぬ。中国で『聊齋志異』が占める位置は西洋で『千夜一夜』の書が占める位置に匹敵する。

エドガー・アラン・ポーやホフマンとは違い、蒲松齡は自分が語る怪異に驚いてはいない。ここでスウィフトを思い浮かべたほうが理に適っているが、それは単に寓話の幻想性のせいだけでなく、簡潔で非個人的な報告的口調と、諷刺的意図のゆえでもある。蒲松齡の地獄はケベードのそれを思い出させるもので、不透明な役人の世界である。彼の物語の廷吏、下級官吏、裁判官、書記らは、およそこの地上のいかなる所、いかなる世紀にも見られる典型的なそれらのものと同じように賄賂のはびこる官僚の世界に存在する。迷信深い性格を賦与された中国の人たちが、ともすればこれらの物語をあたかも現実のことであるかのように読みがちであったという事実を讀者は忘れてはなるまい。彼らの想像力にとっては、カバラ信奉者の表現に従えば、上位の秩序は下位の鏡なのだから。

最初のうち、テクストは単純素朴にみえる嫌いなしとはしないが、そのうちやがて明白な諧謔と、諷刺と、したたかな想像力が感じられてくる。それは、試験に備える書生、山中での饗応、我を忘れたうかつ者といった共通の要素でもって、目に見える努力もなしに、水のように不安定

な、また雲のように変幻するとほうもない世界を仕組むような想像力である。まさに夢の王国、あるいはそれ以上に悪夢の回廊と迷路とが織りなす王国である。死者は生者に転じ、見知らぬ訪問者がたちまち虎となり、確かに惚々と見とれるほどだった美姫が、顔の青い鬼の披っている人皮だったりする。ある梯子は天の九霄の高みに消え、別の階段は井戸の奥底にあるが、そこはもう死刑執行人や地獄の法官や師匠たちの住まう冥界である。

蒲松齡の短篇小説のあとに、あのほとんど無限につづく小説『紅樓夢』の一部をなす、驚嘆おくあたわざると同時に人を惘然ぼうぜんたらしめる二篇を加えておいた。作者（単独か複数か）については確かなことはあまりわからないが、それは中国においては小説と劇が下位のジャンルだからである。『紅樓夢』は中国の小説のなかでは最も有名であり、またおそらく最も人気の高いものである。登場人物は四二一人、うち女が一八九人、男が二二二人で、この数字はロシア小説やアイスランドのサガをも凌ぎ、一見しただけで読者は意気銷沈させられてしまう。完訳なら（それはまだ試みられたことがないが）三千ページを超え、百万語は要するのではなからうか。十八世紀の作で、作者はたぶん曹雪芹そうせつきん。「夢のなかのドッペルゲンゲル」は、アリスが赤の王様の夢を見、王様が彼女の夢を見ているあのルイス・キャロルのトイードルダムとトイードルデーの章を予

兆している。ただし、赤の王様の挿話は形而上的幻想であるのに対し、宝玉のそれは悲哀と孤立無援と彼自身の内面の非現実性を負荷されているところでは違っているが。「鏡のなかの雲雨」は、表題にエロティックな比喩が隠されているが、孤独な快楽が文学においてこのようにメランコリックに、しかもある種の尊厳すら帯びて扱われた例は、たぶん他にはないのではなからうか。

一国を表わすのに、その国民の想像力ほど特徴的なものはない。小冊ながら本書は、この地上でもっとも古い文化の一つであると同時に、幻想小説へのもっとも異例な接近の一つをかいま見させてくれるのである。

ホルヘ・ルイス・ボルヘス

氏神うじがみ試験

